

群れをなした蛇 = = = 三州横山話より

蝮は魔虫だから、これを殺して、桑の木（楊ともいう）や、ウツギの木で皮を剥くと、そこいら一面の蝮になると言います。横山の早川定平という四十年前に亡くなった男の話だそうですが、この男が若いとき、家を壊したあとの、古木の積み重ねた下から、蝮が一つ頭を出しているのを見つけて、殺して皮を剥くと、同じ場所にまた一つ頭を出しているの、それも殺して皮を剥くと、あとから後から、同じように一つずついるのに、とうとう十三まで殺してもまだ一つ同じようにいるので、豪気な男ゆえ、何程いるのかと言って、棒切れでその木を持ち上げてみると、中に何百と数知れぬ蝮がいたと言います。

何らか眼のせいで、仮に蝮に見えたのではなからうかと言って、殺した蝮を串にさして、軒に吊るしておいたそうですが、いつまでたっても、蝮に変わりはありません。そのとき何の木で皮を剥いたか聞きませんが、蝮にはこうした話が、他にも三つ四つあります。

現今八十余歳になる小野田ぎんという老婆の話ですが、この老婆が子

供の頃、村の北沢という幅一間半ほどの小川の岸で、山口豊作という友達と遊んでいると、川下から、何千と数知れぬ蝮の群れが、ぞろぞろと、水も見えな

いほど登ってくるのを見て恐ろしくなって、近くの家の、早川弥三郎という男を呼んで来ると、その男が棒切れを持って、岸に這い上がろうとする蝮を、払い落とされたと言いますが、大部分は、川上へ登って行ったそうですが、後から後から果てしなく続いてくるので、いったん家へ帰って、ふたたび行って見た時は、もう一つもいなかったと言います。



ウツギは「空木（うつろぎ）」の意味で、枝が中空になっていることから、その名がつけました。5月（卯月）に純白の花を開くのでウノハナの別名があります。

ウツギの材は、太厚で堅く緻密なために木クギの材料になり、木工家具などの鉄クギが使用できない部分に用いられています。また、小楊枝、小鳥の止まり木などにも用いられています。

別名の「ウノハナ」は、卯月（うつき・陰暦4月）に花が咲くという意味という、古くから初夏の花として親しまれています。

